『学校を核とした地域力強化プラン』に係る県推進協議会

◆ 推進協議会委員（敬称略）

No.	氏　名	所　属	No.	氏　名	所　属
1	市田　太芽男	竜王町立竜王中学校　校長	5	髙木　和久	文部科学省総合教育政策局地域学習推進課　コミュニティ・スクール推進員
2	小川　祥枝	高島市教育委員会事務局教育総務部社会教育課地域教育連携室　室長	6	武井　哲郎	立命館大学経済学部　准教授
3	上村　文子	滋賀県スクールソーシャルワーカースーパーバイザー・スクールソーシャルワーカー	7	溝江　　透	東近江市社会教育指導員 統括的な地域学校協働活動推進員
4	佐々木　保孝	天理大学人間学部　准教授	8	村田　耕一	滋賀県教育委員会事務局 幼小中教育課　参事

（Ⅰ）　推進協議会の概要

◆第１回推進協議会

１　協議会概要

期　日：令和元年７月２日（金）14:00～16:30　　会　場：大津合同庁舎７階　７－Ａ会議室
出席者：武井座長、髙木副座長、市田委員、小川委員、上村委員、佐々木委員、溝江委員、村田委員
オブザーバー：(県ＣＳアドバイザー) 伊藤アドバイザー、北島アドバイザー、北辺アドバイザー、松田アドバイザー
事務局：県生涯学習課（７名)、子ども・青少年局（１名）

（1）　開　会　　県生涯学習課長　挨拶
（2）　座長、副座長選出
（3）　協　議
　①令和元年度「学校を核とした地域力強化プラン」について
　②今年度の力点について
　③令和元年度年間研修計画について

２　協議要旨

○学校を核とした地域力強化プラン」について

・ＣＳアドバイザーの強みを生かしていく。県の方向性とぶれない様にしていくことが大切。県立学校で伝えるスタンス、市町で伝えるスタンスを確認するためにもアドバイザー会議などでの共有が必要。
・実践事例集の書き方を検討しようという話があったはず。目標があり、活動があって地域がよくなっていく。
・この事業を始めてボランティアが６００名を越えた。大きなボランティア団体ができつつあることを考えると、このプランが生きているのではと感じる。
・家庭教育は全ての教育の基盤。子どもが居て、住民がたくさんいる地域でも地域の力が弱いところがある。先生でも親でも地域の支援で子どもが変化していく場面を見る。地域のカバーで個への見取りが増える。地域の方は具体的に「何を手伝えばいいのか」と尋ねられる。貧困や家庭的に厳しい子どもたちが、放課後子ども教室や地域未来塾などにつながっていくことを希望する。
・学校評議員をそのままスライドさせて学校運営協議会にすることは意味がない。それは子どもをこうしたいという「ねらい」が無いから。実際に「こうしたい」だから「この人」とならなければいけない。

○今年度の力点について

▪力点「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進」
　（1）「一体的推進を図っていくために、どのような働きかけができるか」
　（2）「学校運営協議会が評議員会のすげ替えにならないための働きかけについて」

⇩

①学校にどう働きかけていくかという視点・・・課題解決型の提案
②校長先生へのアプローチ・・・校長先生への説明機会の確保
③市町の行政部局への働きかけ・・・成功事例のモデルづくり

◆第２回推進協議会

１　協議会概要

期　日：令和２年２月６日（木）14:00～16:00
会　場：滋賀県庁本館４階　４－Ａ会議室
出席者：武井座長、髙木副座長、市田委員、小川委員、上村委員、溝江委員、村田委員
ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ：(県ＣＳｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）伊藤ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、北島ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、北辺ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、松田ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ、宮治ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ
事務局：県生涯学習課（８名）こども・青少年局(１名)

（1）　開　会　　武井座長　挨拶
（2）　協　議
　①令和元年度各事業の成果と課題、今後の方向性について
　　ア　県実施事業について（県主催研修会の振り返り、および来年度の方向性）
　　イ　各市町における実施事業の状況について（各事業における市町訪問ならびに、実践報告から）
　　ウ　コミュニティ・スクール導入状況およびＣＳアドバイザー派遣について
　②今後の地域と学校の連携・協働体制の推進の在り方について
　　ア　情報提供（「学校を核とした地域力強化プラン」令和２年度予算案について）
　　イ　今後の県の推進方策について
　　（柱１）「コミュニティ・スクールの県立学校へのアプローチを
　　どのよう図っていくか」
　　（柱２）「教育と福祉の連携をどのように図っていくか」
　　（柱３）「小さな自治体への支援をどのように図っていくか」

２　協議要旨

・研修会は、毎回まとめて集めている印象を受ける。もっと個々のニーズに応じた研修でもよいのではないか。
・働き方改革とＣＳが関連づけられているが、文科省には定数改善でしかないと伝えている。働き方改革と一緒にすると混同・混乱する。
・ＣＳに不安。社会教育が風前の灯火状態の中で持続可能なものか懸念されている。学校長の立場からだと、地域連携は十分できていると認識している。学校は積み上げていく意識が強い。スクラップ＆ビルドの視点をもっと浸透させないといけない。学校側はやはり負担感がある。
・ＣＳを契機として社会教育を盛り上げていきたい。
・多忙な現場の先生には、必然性、目的性を理解してもらうことが大切。教育課程は教務主任に集約されていることが多い。
・福祉と教育では、家庭でも学校でもない第３の場が必要だと言われている。社会教育でこの第３の場をつくっていくことが必要になってきている。家庭教育支援はしんどい子にフォーカスが当たるようにしていく支援。子どもは多くの方にいっぱい愛してほしい、そのためにＣＳが機能していくとよい。生徒指導上の諸課題とリンクさせて周知していきたい。
・高校教育関係者の方にこの会に関与してほしい。事務局レベルでも、部署間の垣根を越えて行動することが大切ではないか。
・高校のＣＳは生徒の参画だと思う。小中と地域の中で育ってきて、高校が最終ステージであり、「自分たちのために、地域のために」高校生が参画することが必要ではないかと考える。
・学校評議員がそのまま学運協委員になることが多いと聞いたが、管理職がＣＳについてどういう思いをもっているかを語れないといけない。
・子ども、保護者、先生の熟議が大切。お互いが同じ方向性を向いていることが重要。好事例を示していけるかが大切。
・ＣＳを子どもに教えることが大切ではないか？教師が理解し、子どもに伝えられるようにしないといけない。
・学校がどうあるべきかということを、ＣＳを使って考えていく視点が大切。